

山岳会の一年



1月、取立山を登る。スキーの人、歩きの人、それぞれの技術に応じて冬の山に登る。下りはスキーが断然素敵だ。

登り方はいろいろあるけれど、ともかく山に登って一日山にいて満足して帰ってくる、そんな人たちの集まりが山岳会です。

どれくらい山に行くのか、福井山岳会の平成一六年度の集計結果では、一回の山行を一点として（但し、会の特別な行事、合宿や草刈り、冬山訓練などは点数が高い）、高の人は年間九十三点。これは一年を通じて日曜日毎に山に行っても得られない点数です。二十点以上の人が二十数名います。

山岳会の一年を紹介します。

年末年始は冬合宿です。近年は越前・美濃国境に四日から五日入っています。食料や燃料を通過地点に予め置いておく、いわゆるデポ作業が必要ですが、それを十一月終わりにある忘年会の翌日にやるので、前夜飲み過ぎるとひどい目に遭うことになります。

デポ缶はいわゆるステイル製の一斗缶、通常の食料の他、忘れてならないのがアルコール類です。翌日のエネルギーのため、ぐっすり眠るためにも欠かせない一点です。

雪のある時期はそれぞれの力量に応じて道具と山が決まります。スキーよりも歩く方が得意な人はスノシューでひたすら歩き（これは少数派）、そうでない人はスキーで登っ

てスキーで下りてくる。

写真は今年の新年会の翌日取立山に登ったときのものです。このときもスキー組とスノシュー組とがありました。筆者は若いときにすっかりスキーをしておかなかったので、颯爽と滑り降りる人たちを羨ましく眺めるばかりです。

雪が解けると新緑の春、萌えだした若葉に会いたくて山には入ります。この時期、登山中にたまたま見つけた山菜をいただくことはあります。見たのに採取しない変人は、さすが、いません。それどころか、山菜を採るためだけに山に入ることも、この時期の登山の楽しみのひとつです。

谷を詰めて頂上にいたる沢登りは六月頃から始まります。水は何ともいえず心とむもんです。沢では岩登りの技術が必要なので、これも力量に応じて様々な沢に入ることになります。岩登りの技術だけでなく、水泳も出来ないと困る状況も多々あります。沢登りは水が冷たくなるまで続きます。

秋の紅葉の時期には山は、一面雪のあの冬の美しさに匹敵するほどの美しさを見せてくれます。どうしてあれほどきれいになるのか。感謝したいほどです。

雪の冬も新緑の春も生命力に満ち溢れた夏も、そして紅葉の秋も、どの季節であつても山にいと、山の会に入つていてよかつたとつくづく感じます。気心知れた仲間と山に行ける幸せはなにもものにも代え難いものです。一年を通じて山に入ることが出来る技術を長いことかかつて習得したのは、人生の選択の中で最良のひとつだつたと今つくづく感じています。

人は死ぬと土と空に帰ると納得するのか、生命そのものは続くと思えばいいのか、あるいはその他の解答があるのか分かりませんが、山にいる間はこのような問いがどこかに消えています。

ああ、これでいい、何も言うことなし、問いが消えることが答えだと思つています。

(二〇〇五年十二月七日)